

テーマ1：今までの自分、これからの自分

題名：『顔を上げて』

氏名：村上 蘭

私は平均して一日八時間をスマホに費やしているらしい。八時間といえば、一日の三分の一である。かなりの異常事態だ。インターネットには、やれ芸能人の不倫だの、やれ配信者の炎上がどうだの、罵詈雑言が溢れかえっている。そんなものを四六時中見ているせいか、スマホなんて持っていなかった小学生の頃と比べて、人と関わるのが億劫になった。相手が自分についてどう思っているのかを考えると、とてつもなく怖いのだ。

そんな私だが、高校に入ってからコンビニでアルバイトを始めた。コンビニには色々な人が来店する。お年寄り、サラリーマン、高校生…。最初の頃はレジに立ったたびに緊張が止まらなかった。もう辞めたいと思っていた矢先、お客さんの一人が「研修中？頑張ってるね。」と声をかけてくれたのだ。この一言で私はかなり救われた。ふと思い返せば、ミスばかりの私に怒る人は誰もいなかったように思う。けれど、笑いながら励ましてくれる人や、笑顔でお礼を言ってくれる人は、確かに居た。

世間はどうか、私が思っていたよりかは冷たくなかったらしい。インターネットで見かける攻撃的な言葉は、この世界の一部にしか過ぎないとようやくそこで気付けた気がした。スマホから顔を上げるだけで、世界は少し違って見えるのである。

テーマ2：自分が思う「多様性のある暮らし」とは

題名：『私たちが習った道徳』

氏名：坪 沙那美

小学、中学と私の年代はとても良い子が集まった世代だと言われてきた。確かに今思うとそこは理想の多様性のある暮らしだったように思える。いじめ問題やジェンダー問題が世間に広まった私たちの時代は、先生からよく教育を受けてきた。同性愛への差別はしてはいけない。イジメは絶対にダメ。周りの人のことをよく見て気かけられる人がなにより素敵だ。私たちはその話をきいてここまで育ってきた。ある日、私は塾に行くためバスに乗っていた。バスの中では同じくこれから塾に行くのであろう中高生で息苦しいくらい満員だった。その時、ふと優先席が目に入った。その席は誰も座っていなくてぎゅうぎゅうのバスの中で存在感をはなっていた。私は「何で誰も座らないんだ」と思った。誰かが座ればそれだけで大分余裕ができて楽になるのに誰も座ろうとしない。それは、先生が私たちに「学生の間は優先席に座るべきでない」と教えてきたから、誰も座らないのではないか。周りを見てみろ周りには学生しかいない。席を譲るべき年寄りも妊婦さんもない。でも誰も座らない。私は怖くなった。これまでイジメも差別もない良い子の私たちは本当に多様を理解することができていたのか。疑いたくなった。私にはまだ、多様性のある暮らしが分からない。しかし、理解していないのに理解した風を装わなければならない暮らしは多様性のある暮らしとはいえないと思う。